

第 I 部 講演記録

「自律的学修者を育てる教育環境づくり」

－先行学部の経験に学ぶ－（第9回経験交流会）

2008年10月29日（水）14：00～

【赤坂】 それでは定刻の2時になりましたので、中京大学国際教養学部将来計画委員会教育部会主催、「FD・SD コンソーシアム名古屋」の後援による第9回経験交流会を開催させていただきます。

本日のテーマは、「自律的学修者を育てる教育環境づくり」、副題が「先行学部の経験に学ぶ」というテーマで開催させていただきます。

会の最初に当りまして、本学の学長であります北川薫学長よりご挨拶をちょうだいしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【北川学長】 こんにちは。今回、第9回経験交流会のタイトルが「自律的学修者」という、「学修者」の「しゅう」という字が「修」という字で、「習」という字ではないということに今回の何か意図があるかと思っております。

さて、本学が所属する私立大学連盟、それから大学基準協会、さらには文部科学省、そういったところが実は教育に関して数多くのセミナーを行っております。昨年の4月に学長になりましたが、昨年の8月末の会から始めてそのような会に6回か7回出てまいりました。そこでは全国の大学のいろいろな状況を身をもって感じました。

こういった教育改革の流れとといいますか大学経営の流れ、改革の流れとといいますか、おおむね全国的には西高東低の傾向があるかと思えます。京都を中心に関西が大変熱く動いております。関東のほうは「面」というよりも「点」という感じだと思えます。いずれにしろ、全国的に見てこういった教育、あるいは大学経営の改革が激しく動いていることはご承知のとおりだと思います。

この近在においても名古屋大学が中心となって、今年度、コンソーシアムが文部科学省の予算を得て、3年計画で立ち上がりました。名古屋大学、南山大学、名城大学、本学ということで、これから3年間、今年は事実上、あまり活躍するということはないかもしれませんが、動き始めました。

本学においても自己点検・評価委員会を中心として、現在、FDに関する新しい組織の枠組みを考えているところで、来年から動くように頑張っているところです。その点、今後、よろしくご協力をいただきたいと思います。

全国的に本当にいろいろな教育の流れがございまして、最近目立ったのは、教養大学化ということでICU、それから桜美林大学もその方向に動きました。そして、先日聞きましたのは東京女子大学、これが今、教養大学化ということで動いているとのこと。いろいろな意味合いで、今までの一律の大学経営というのは随分様変わりをするだろうと思っております。

本学のような規模の大学になりますと、セミナーで話し合っているにしても、なかなか動きが鈍いというのが正直なところ。今申し上げたICUにしても桜美林にしても東京女子にしても、規模的に言えば中規模といったところで、本学よりは小さい規模かと思います。典型的な話として、東京の6大学の私立ではなかなか動きが大変だということも先日のセミナーで聞きました。

いずれにしろ、そういう流れの中、本学は、今回のように昔の教養部が長い間この経験交流会ということで教育改革に努めてこられました。今年度も新しく国際教養学部になってからも今まで以上に精力的におやりになっており、大変心強く思っております。今後とも中京大学のこうした流れの核となって頑張りたいと思いますし、また大学全体においても、また学長としての立場からしても頑張っていきたいと思っています。どうかよろしく願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

【赤坂】 どうもありがとうございました。

それでは、さっそく第I報告に移りたいと思います。

郡伸哉先生から、「国際教養学部のとりくみについて」お願いします。よろしく願いいたします。

【郡】 私は、国際教養学部で学部固有科目運営委員会の委員長をしております郡です。

今日は、「先行学部の経験に学ぶ」ということの最初に国際教養学部のとりくみを紹介するというので、まず国際教養学部がどのような内容の学部であるかという概要をお話します。その上で、「自律的学修者を育てる」という観点から我々がどんな課題を抱えているのかということを中心に、今思い付く課題を列挙するような形で終わると思いますが、そういうお話をさせていただきます。

お手元にA4の紙を1枚お配りしましたが、それをご覧ください。

まず一番目ですが、これは、学生便覧にも書いてあることなのですが、私たちの学部の教育上の特色を4つにまとめたものです。「2言語教育」ということがまず一つあります。これは英語ともう1つの言語なのですが、そのもう1つの言語は5つ選択肢がありまして、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、中国語、これから1つを選択し、入学後すぐから集中的に勉強します。同時に、英語も勉強を続けるということです。

それから、もう一つは「多角的な世界理解」ということで、言語の習得ということだけにとどまらず、世界を多角的に理解するために、広い分野を4つの科目群に分け、さまざまな科目を設けています。言語文化系、思想文化系、歴史文化系、国際社会系というように分けております。

それから、三つ目は「演習と卒業研究」です。これはどういう大学でも似たようなことがあると思いますが、2年次から演習を必修とし、4年次では卒業研究というものを必修として課すということです。

そして、最後に「海外で学ぶ」ということですが、これは2つ掲げました。まず先ほどの5言語の国に1セメスターの間行って、特に2年次の秋学期、あるいは3年次でもいいのですが、に行く「海外課題研究」というものがあります。これは必修ではなくて、推奨しているということなのですが、今の段階では1年生のほとんどが希望しております。

それからもう一つは、ほかの学部と同じように、英語圏への短期留学も単位化しています。

以上、教育上の特色ということでまとめたわけですが、次に実際にどういうとりくみを初年度にしたかということ振り返ってみます。授業としては1年目には5つの言語の授業が一番多く、次

に英語、それから、「国際教養学入門」という4つの分野の基礎を学ぶ講義があり、これらを合わせて1年間を通して8コマ、学部固有科目が開かれております。

申し遅れましたけれども、国際教養学部というのはこの大学の方にご存じだと思いますけれども、ほかの大学の方もいらっしゃるかと思いますのでひとこと言いますと、この学部の教員はほかの学部のすべての学部に対して開かれている全学共通科目も担当しつつ、同時に国際教養学部の固有科目も担当しているのですが、私の今日の話は学部固有科目に絞ってお話をさせていただきます。

二番目の授業のことは以上ですが、行事としては、例えば中京大学に來ている外国人留学生と学生が交流する懇親会、それから、学生座談会を開いて学生の意見を聞くというようなことをしたり、これから先は就職のことを意識したような講演会を学生に対して開くとか、そういったことを計画しています。

それから、私たちの学部には学生ラウンジという、学生用のスペースがあります。そこにはパソコン、図書、その他の資料を設けておまして、eラーニングの実習もできますし、CS放送を見ることがもできます。このあたりをうまく使えば、まさに自律的学修ということができるのではないかと思います。ただ初年度はいろいろな混乱もありまして、なかなかうまく使えていないのが現状です。

次に「学生組織の立ち上げ」ですが、これも自律的学修ということにかかわる重要なことです。どんな学部に行っても何らかの形でこういう組織があるのでしょうかけれども、やはり初年度ですから何かきっかけを与えてあげないとできないだろうということで、そういうきっかけを作りました。学生の中に自主的に取り組もうという人たちが出てきていますので、これから進んでいくと思っています。

それから、来年度から演習、これは当然学生の自律的な学修の一つの核になるわけですが、それが本格的に出発しますので、その準備が始まっています。

もう一つは先ほどの留学、「海外課題研究」ですけれども、これもただ行って語学を学んできておしまいというのではなくて、自分で計画を立てて何を学んでくるか、そういうことを十分意識した上で学んで帰ってくるということをさせないといけないので、これも自律的学修ということにかかわる重要な点だと思っています。

さて、そういうことを現在のところ進めているわけですが、三番目に今後の課題ということで、今、思いつくこと、考えられることを挙げてみました。

演習がこれから始まりますが、3年間必修で、2年、3年、4年とやっていきます。4年生のときには卒業研究を書かせるから、これをどう指導するかを詰めていかないといけない。それが今後の課題です。

それから、留学に関してなのですが、これもまだ始まってなくて、来年の秋から始まりますが、この準備でいろいろ大変なことがあります。特に、5つの言語ということで行き先だけでも5つに分かれておまして、指導体制、危機管理体制などを十分整えなければいけません。学生の自律的学修ということに関して言えば、とりわけ、留学をうまく活用して学生が自律的に取り組めるようにする工夫がいると思っています。そのために海外課題研究計画書というものを行く前に書かせ、帰ってきてからは報告書を書かせるが、今、それらの書式を練っているところです。

それから、「学生の組織始動」と書きましたけれども、学生のほうはいろいろ自分たちでやりたい

ことがあるということで、例えば新入生歓迎のイベントをしたい、あるいは、留学から帰ってきた後の帰国報告会のようなものをしたいというような希望も挙がっています。こういうことを含めて学生組織を進めていく上で、基本的には学生の自主的な組織であるべきでしょうけれども、教職員とどのように連携していくか、このあたりが教員の学生に対する姿勢、自律的学修というものを引き出す姿勢にもかかわってくると思います。

次に「学習補助」と書きましたけれども、授業以外の、あるいは授業を拡大したところでの活動、これも考えないといけない。e ラーニングを導入していきまして、これから本格的に活用していくところですので、これも中身をよく考えて進めていかないといけません。

それから、「その他」と書きましたけれども、学習を補助するような行事等をこれからいろいろと考えていかないといけないのですが、まだ初年度でいろいろなことに追われておりまして十分に計画ができておりませんので、これからの課題となります。

その次に書きました「就職関連対策」ですが、わたしたちはこれまで、入試、入学、そして、入ってどう教育するかということばかりに注意を注いでいましたので、これからの重要な課題として上がってくるものです。

その下に書きました「ラウンジ活用法の再検討」ですけれども、これは先ほど言いましたが、今のところそれほどうまく使えていないというのが実情なのですけれども、これから、e ラーニングソフトも使うし、学生組織もできると、それらの一つの活動拠点になると思います。それから留学に関してもラウンジは自主的に学習するための一つの拠点ということになると思っています。

このように、ラウンジ活用は上に挙げたもの、さらには演習の学習にもかかわってきますので、そういったいろいろなものが総合的にこのラウンジとかがわってきます。ラウンジが一つの拠点として学生が自分たちで進んで勉強する場、そういうものを引き出す場になっていくように、これから計画すべきだと思っています。

そういうことで課題ばかりを列挙したわけですが、最後に、私自身は5つの言語の中のロシア語を教えておりますので、その立場からひとこと申し上げます。そこに「達成度の自己評価とモチベーションの向上」と書きましたけれども、1年目の最初の時期ではなかなか難しいと思うのです。今は始まったばかりで、これこれの表現を覚えた、これこれの単語を覚えた、文法や熟語を覚えたというように進んでいくわけですが、自分がいったいどれぐらいその語学ができて、どれぐらいコミュニケーションができるだろうということが、学習している者は皆、気になると思うのです。しかし、始めたばかりのころは本当に大海に漕ぎ出したばかりですので、よく周りが見えない。

そこで、例えば1年が過ぎたあたり、そして2年目に入って半ばあたりに来るころ、ちょうど留学もそのころに始まるのですけれども、そのあたりが自分自身を振り返ってどのぐらいまで今、自分は来ている、これからはどういうところを中心に勉強しないといけないのかということを考えないといけないだろうと思うのです。それが達成度の自己評価ということで、それが分かりますとある程度見通しが付き、一層モチベーションも上がるだろうと思います。

そのためにどんなことをすべきか。先ほどの海外課題研究というものを通して自分が今、語学力の上でどの位置にあるのかを確認し、語学力だけではなくて、例えば行き先の地域についての知識、そういったものについても自主的に調べてもらって、自分たちの知識を整理する。そういうことが必要だというように思っています。

その際いろいろなことが可能だと思うのですけれども、例えばいろいろな語学の本、参考書、そのほかテレビとかウェブサイト、さまざまなものがあると思います。もちろん教員のアドバイスも含むわけですが、その一つの核となるのが、海外課題研究であって、それに取り組むために半年以上前から準備するということが大いに役立つのではないかと。その際、忘れてはいけないのが、海外課題研究はかなりの学生が行きますけれども、行かない学生も若干いることです。そういう人たちのことも考えた上で、こういった海外課題研究を中心とした学生の自己評価とモチベーションの向上ということを考えないといけないかなと思っています。

かなり抽象的な話でしたけれども、具体的なさまざまな取り組みということに関しては、あとのお二人のご報告で聞かせていただき、そこでまた我々のほうのことも話題にできるかと思います。

以上で私の報告を終わります。

【赤坂】 どうもありがとうございました。それでは急がして申し訳ないのですが、第Ⅱ報告へと移らせていただきます。総合政策学部の羅一慶先生から「学生自らが論点を認識し、考える授業」についてご報告いただきます。よろしく願いいたします。

【羅】 ご紹介いただいた羅一慶と申します。私の専攻は「政治学」ですが、赤坂先生から、私が担当している「公共選択論」という必修科目で取り組んでいる「自律的学修のための仕組み」を紹介してくださいという依頼を受けて、この場に立つことになりました。したがって、今日の発表は、総合政策学部の全体の取り組みではなくて、あくまでも私が担当している科目において試行錯誤しながらやっていることを紹介することにします。

まず「自律的学修」という概念ですが、初めての概念でしたので、インターネットで検索してみました。京都大学の理工学部で「自律的学修を促す教育」に関する文章が出ておりまして、それをみなさんに簡単にご紹介させていただきます。

その内容をみると、学問の基礎体系をただ深く習得するだけではなく、創造的に展開する能力の養成、そして個々の知識を総合化させることで、新たな知的価値を創出する能力を養成する、と書いてあります。この文章をみて私なりに定義を試みました。二つの観点からですが、まず、キーワードでもあると思いますが、自らが考え、また新しい知識を吸収し創造する姿勢をもつ。さらに、自由を尊重し、既成の概念を普遍的なものとして受け入れない、そういう人が「自律的学修者」であるといえるように思います。

こういう概念を念頭におきながら、私が担当している科目でどういう仕組みを作っているのか、その概要をこれから説明させていただきます。

「公共選択論」という授業の特徴のいくつかを申し上げます。1番目の特徴として、この科目は2年生の秋学期の必修科目になっています。そのため、他の科目と比べれば比較的に出席率は高いといえます。2番目は、金曜日の1限目の科目ですので、私だけでなく、学生たちも一週間の疲れが結構溜まっている時期になるのですね。私は6時ぐらいに起き、学生たちと8時に何名かと約束をしてキャッチボールをしてから授業に入ることにしているのですが、私自身も大学に行くのがやや面倒な気分になるような日におこなっている授業です。したがって、遅刻しないで教室に来ている学生たちをみると、かれらのやる気をかなり感じますが、頭の中がスムーズに回転するまでには時間が少しかかる、そういう状況でおこなわれている授業であることも念頭においてください。3番目は、多人数の授業ということです。2008年度の場合、275名が履修しております。大規模授業

では、どうしても騒がしくなる傾向にあります。これを教員側の課題という観点からみると、学生たち自らが興味を持つことができるような、学生たちの興味をそそるような講義のやり方をやっ
ていかないといけない、そういう特徴をもっている科目です。

こうした特徴をもつ「公共選択論」という科目を担当しながら、私自身が段々と確信を深めてきたポリシーというのがあります。それを述べさせていただくと、第1は「先生自ら楽しめない授業は、学生も楽しめるはずがない」ということです。だから、私自身が結構ハイ・テンションになって学生たちの興味をそそるような、そういう生き生きした姿を見せないと、授業が始まってから20分過ぎると30%ぐらいの学生の居眠りが始まるのです。そうすると、騒ぐような学生たちも出てくる。

そこで、オリエンテーションの時に、「この授業において私の役割は、あくまでも監督あるいは演出家に過ぎない」「この授業の主人公はみなさんです。私は、この授業を通して『遊ぶ』ことができるような、あるいは『遊び心』を刺激できるような素材を提供しますので、思い切って遊んでください」ということを強調します。そして、授業に入る前には、私自身にも「Let's Play!」という、そういうスローガンのようなことを言い聞かせて、授業をしています。

2番目のポリシーは、多くを語らないということです。90分授業ですが、「1回の授業で伝えるメッセージが1つか、2つあるならば、それは大成功だと考えてもよいのではないか」ということです。私自身の大学生活を振り返ってみると、履修していた必修科目の「政治学概論」以外に面白い科目が1つもなかったのです。だから、結構居眠りしていたし、また授業内容もほぼ覚えてないのです。むしろ授業が終わってから、私の興味にもとづいていろんな本を読みながら勉強したことがあります。少なくとも私の場合、必修科目を履修して勉強になっていたことは、それほど多くなかったのです。

こうした経験から、私は1つのメッセージでも学生の心に刻み込むことができるような授業をやりたい、そして、このメッセージを踏み台にして新たな知を創造していくような姿勢を学生たちに育てることができれば、授業の目的は達成したと評価してもよいのではないかという考え方をしています。

では、こういうポリシーにもとづいて「公共選択論」という科目でどういう教育目的を達成しようとしているのかを述べます。

この「公共選択論」という学問は、「経済学」と同じような前提から出発をしているのです。つまり「人間は自分の利害関係が大きく関わっているような場合には自己利益を優先し、またその利益を実現していくために合理的に行動する傾向がある」ということです。こういう前提を踏まえて、私が授業で一貫して追求しているのは、「利己性」や「利己的な行動」から、「相互扶助的な関係」をどう作っていかうとするのか、という問いです。「公共選択論」という“色眼鏡”を借りて、問題の本質が何なのかを発見し、またそこから分析と診断をおこない、さらに解決策を導き出すような、そういう考え方を学生たちに訓練させることです。こうしたことをこの授業の主な目的としております。

それでは、これらの目的を実現していくために取り組んでいるいくつかの仕組みを述べさせていただきます。

まず、成績評価ですが、オリエンテーションの時に、この授業は100が満点ではなくて「120点以上」を基準にして採点をしていると強調しています。その構成は、授業中に出す小レポートが10

回もあり、1回当たり5点満点で50点満点になります。試験はなしです。試験はなしで、期末レポートをA4で5枚以内のものを書かせますが、これもまた50点満点になっています。これで100点になりますが、さらに、授業にどれほど積極的に参加しているかを加点します。つまり、私が問いかけた課題にどれほど積極的に応答しているかを20点で評価し、さらに私が学生を指定して質問した問題に対してどれほど正確に解答しているかに応じて「ボーナス」を5点というふうに与えています。こういう仕組みに効果があるのかと思っていましたが、意外に、このボーナス点数には効果がありまして、このボーナス点数を2回得ることができれば小レポートを1回出さなくてもよい、言い換えれば、1回分欠席してもカバーできるということになるのですね。

2番目の仕組みですが、先ほども申し上げた通り、だいたい授業が始まってから30分までは結構集中して聞いてくれるのですが、30分を境目としておしゃべりで騒がしいとか居眠りをする、あるいは本格的に寝てしまうような学生も出てきますので、私は授業中にパズルを2回することを試みています。まず、授業が始まってから30分超えたところで1回目のパズルを出します。解答時間は10分で、学生同士で自由に意見を交わしてもよい。このように会話する時間を与えていますので、私が講義している時は、今は何がポイントなのか集中して聞いてほしいと強調しています。2回目は、1回目のパズルの解答を終えてから10時20分頃におこないます。このパズルの導入は大変効果を上げています。まず、居眠りする学生がほぼなくなってしまうのですね。先週の授業でも200人以上の学生の中で居眠りする学生を私は1人も見つけられませんでした。なぜそうなるのかというと、パズルに対する学生たちの解答は意外にも結構真剣でして、この2回のパズルが授業の「緊張感」を生んでいるのですね。パズルによって相当に学生たちの集中力が高まってくる。つまりこの2回のパズルが授業の流れによい意味での強弱をつけているのではないかと私は解釈しています。

3番目の仕組みは、「フィードバック」です。2回目のパズルを出すと述べましたが、その解答を授業が終わってから読んでみて、その中で良い意見を次週の授業の初めに紹介することにしていきます。9時から9時10分の間にしています。授業を始めるオリエンテーションの時ですね。紹介するものは、学生たちの了解を得てからにしています。そうする理由ですが、過去に一度、学生たちの同意を得ないで紹介したところ、良い意見だと褒める内容だったのですが、自分の名前が出ることに関して凄くアレルギー反応を起こすような学生もいたのですね。それで、去年から学生たちの同意を得て、良くなかった意見に関しては公開しない、しかし、みんなが共有してもよいような内容に関しては共有しましょうという同意を得てから紹介をしております。

このようなフィードバックも、私からすれば大きな効果を上げていると思います。これまでは、例えば「偏差値」みたいなものを通して友達同士を評価していた。そういう雰囲気ががらりと変わって、意外に自分の周りに良い意見や立派な意見を出している人が多いのではないかと、つまり学生同士で仲間を見直す、そういう効果を上げていると確認することができました。私は政治学を研究しておりますが、小レポートを書いてもらう際には必ず具体的な例を上げて説明をしてください、と言っているのですね。すると、いろんな例を学生たちが挙げてきますので、私自身も結構勉強になります。学生たちも公共政策系とビジネス系の学生たちが互いに刺激しあい、学びあう、そういう関係ができつつあることを確認しているところです。

例えば、『利己心が利他心よりも基本的である』という命題をみなさんはどう思いますか？ 同意をするのだったら、例を挙げて説明をしてください』という課題に対して、ある学生は、電車の

中に優先席があったり、「ゆずりあって座ってください」と書いてあるのは他人への気配りのない人が多いことを示している。もし利他心を優先している社会なら、このような張り紙をする必要はないだろう、という内容のものを書いてきました。こういう結構面白い意見を学生たちが次々と出してくれます。

4つ目の仕組みですが、授業のレジュメは CUBICS-Learning を通して、授業前日 18 時まで CUBICS-Learning の支援室ライブのほうに載せているのですが、その際に、「キーワード」になってくるようなものは、あえて空欄にしておきます。空欄にしておくことで、予習する学生たちにとっては「キーワード」が何なのか、それを想像させることを期待してやっています。実際に学生たちの「想像力」を向上させていく上でどれほど効果があるのか検証はしていませんが、これも授業に集中させる効果をもっているのではないかと考えています。

5番目の仕組みとしては、授業中での「芝居」や「一人劇」もおこなっています。例えば、「囚人のジレンマ」という概念を説明する際に、登場人物として総合政策学部の先生たちを「容疑者」や「検事」にみたてた芝居をする。学生たちの中には、先生の真似までしながら芝居をしていったりします。これをやっていくと、少なくとも「囚人のジレンマ」という概念は鮮明に記憶に残ります。こうして学生たち同士での再び議論ができるような、そういう刺激を与えることができるのではないかと考えています。

また、アマラティア・センの学説について説明するような場合は、どうしても抽象度が高い内容になりますので、例えば「ワーキング・プア」に関するビデオを見せることによって、講義内容を具体的に理解し、そのポイントを的確に把握することができるようにもしています。

今後の課題なのですが、学生たちへのメッセージでもあるのですが、より勉強したい、さらに調べたいと、そういうメッセージを通して学生たち同士で議論しあう文化を発展させたいですね。そうするためには、より良い素材が必要ですね。こうした素材を開発し、先生同士でこれを共有できるようにしていくことがたいへん重要だと考えております。

また、授業中に学生たちに1回報告をおこなわせるという試みをこれからも継続していきたいです。これはすごい評判がよく、学生自身が大変ビックリしています。275人の学生の前で自分の意見がしっかり述べられる。まずそれにビックリする。しかも、その内容が良かったとき、先ほど申し上げたように、偏差値だけで友達を判断しちゃ駄目だという雰囲気生まれます。ですので、こういう取り組みを今後も試みていこうと考えているのですが、しかし問題もあります。それは、負担の問題、つまり教員側の「コストが大変高い」ということです。まず、小レポートを全部読むためには、少なくとも5時間くらいは要します。それから、読んだ後の選別する作業やらなければならない。これって大変な作業です。

こういうことをやっていく際には、例えば「TA」制度を活用し、授業に関する役割分担を考える必要があるように感じています。それができれば、とくに大人数の授業において、もっと楽にいろんな試みができるようになると思います。教員1人でこういうことを全部やっていくのは、大変なエネルギーを使いますので、大人数の授業では「TA」を用いるような制度の工夫が必要かなと考えております。

以上で私の報告を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【赤坂】 どうもありがとうございました。

それでは、国際教養学部の高遠拓児先生コメントをよろしくお願いいたします。

【高遠】 ただ今ご紹介にあずかりました国際教養の高遠と申します。本日はお忙しいなか、羅先生にはご報告の準備をしていただき、また大変興味深く、しかも具体的でなまなましい授業の様子をご紹介していただき、ありがとうございました。

羅先生がお話をされる場所は、これまでも何回かお見かけする機会がありましたけれども、本当に楽しそうに話しをされる様子が印象に残っております。そして、本日のご報告からはおそらくその雰囲気のまま、学生の前でも振る舞われ、学生も教員も楽しめる、そういう授業風景が私にも伝わってまいりました。

実は、今回のコメントの話を先日、赤坂先生からいただいて以来、私自身、今回の羅先生の報告には興味を持っておりました。と申しますのは、先生方もご承知のとおり、我々、国際教養学部は今年、発足したばかりであり、昨年までは教養部という形で主に全学共通科目を担当してまいりました。

そして、私もこれまでは特に全学共通科目の講義科目「東洋史」を担当してきたのですが、この「東洋史」をはじめとする全学共通の講義科目は、基本的には選択科目となっています。もちろん人文科学系の科目で、これだけの単位を取らないと卒業要件を満たさないという縛りはあるのですが、実際には「文学」ですとか、「心理学」ですとか、「哲学」ですとか、そういった科目の中から、あえて「東洋史」なら「東洋史」を選んできてくれた学生が、今までの主たる教育の対象であったわけです。しかし、私は今年のこの学部の開設に伴い、春学期にまだ半期だけですが、1年生の必修科目を担当するという機会を得ました。そこでは科目の選択というプロセスを経てきていない、この学部にいろいろな期待を持ってきている学生を一律に対象としなければいけない。しかも、少人数のゼミのような形ではなくて、そうした学生が100名以上並んでいるところで授業を展開するというので、これまでの授業のやり方だけではなかなか十分に学生の興味や関心を引き出していけない、この半年間はそのための試行錯誤の期間であったと感じております。

そして、今日、羅先生からお話をいただきましたのは、2年生対象の科目ではありますが、基幹の必修科目で、しかも、200名以上という大人数の学生を前にして、いかなる手法を以って、彼らの関心・興味を喚起し、主体的に参加できるような授業を作っていくのか、そのための具体的なアイデアの数々が紹介されているという点で大変興味深く伺うことができたわけであります。

とくに心構えとして、一番重要なのは学生も教員も楽しんで授業に参加するための配慮あり、「遊び心」という言葉が最初のほうにありましたけれども、それを忘れないような形での授業を心掛けるという、授業にのぞむ者としての初心を改めて教えられた思いがいたします。

また、いくつかお話を伺っている中で、疑問といいますか、お教をを請いたいことがありましたので、その点について、もし可能でしたら教えていただければ幸いです。

まず、授業時のパズル、あるいは学生の意見のフィードバック、そして芝居の導入等、おそらく講義形式の科目としては、なかなか珍しい手法が使われているのではないかと思いました。芝居の導入については、この大人数の授業で学生に芝居をさせる、特に一人芝居ということもあるそうですが、これはある程度選抜した学生にやってもらう形でいったのか、それともすべての学生が参加できるような形の演劇というのを授業の中に取り込まれていたのか、この点を一つお伺いしたいと思えます。

それから、そうした参加型の授業ですと様々な学生が関わってくると思います。中には、受動的といえますか、若干引込み思案で意見が出て来づらい子も中には含まれていると思いますけれども、そうした子たちに対する目配りというのでしょうか、そのあたりの事柄についても、おそらくいろいろな試行錯誤を繰り返されて、今日まで続けてこられたのではないかと思います。その点について何か具体的な取り組みやアイデアなどがありましたら、教えていただければと思います。

それからもう一つ、今日、先生のほうからご準備いただいた資料のほうですと、学期中に10回も小レポートを課しているということですが、こちらのほうは小レポートの課題の水準、学生に問う学術的な到達点を、徐々にステップ・アップしていくような形での小レポートの設定になっているのか、あるいはむしろその反復を通じて学生自身の中でそうした到達点というのが自然に上がってきて、最後には期末のレポートに結びつくような形の仕組みになっているのか、そのあたりの仕組みについて教えていただければと思います。

簡単ですが、本日の先生の報告に対する感想と、若干の質問を申し上げさせていただきます。

【赤坂】 どうもありがとうございました。

では、羅先生、簡単をお願いいたします。

【羅】 コメントありがとうございます。簡単に回答させていただきます。

まず、「一人劇」は、やはり学生にお願いするのは無理なので、これに関しては私が勇気をもってやっております。

芝居ですが、2年生の秋のこの授業が学部すべての学生と会う初めての機会になります。それで、やはり学生たちとある程度のインターアクションがないかぎり、芝居をグループでやるようにするには無理がありまして、芝居はあくまでもアクセントです。授業の中で興味を引き出すための「道具」でありまして、だいたい5分ぐらいで済むようなものをやっております。その中心になっている学生ですが、私が先にシナリオも渡しておかないとできませんので、私のゼミの学生とか、また親しい学生とか、私がよく知っている学生たちをお願いするような形でやっております。

それから、小レポートをほぼ毎回学生たちに書いてもらっていますが、これはステップ・アップ方式ではなくて、講義内容について学生自ら考えていくうえで役に立つようなパズルです。つまり、こういう形で回答していくごとにその内容レベルも高くなっていきますが、それが期末レポートに結びつくようにはしていません。

以上、私の回答を終えさせていただきます。

【赤坂】 どうもありがとうございました。

まだご質問のある方もおられるかと思いますが、時間も押しておりますので、それは討論のところでまとめて、ということをお願いいたします。

それでは、第Ⅲ報告になります。境賛三先生、「国際英語学科の試み—シナジー効果を求めて—」のご報告、よろしくをお願いいたします。

【境】 皆さん、こんにちは国際英語学科の境です。どうかよろしくをお願いいたします。日頃より、国際教養学部の先生方には、色々な形で国際英語学科にご協力、ご支援をいただいております。ここで改めてお礼申し上げます。どうもありがとうございます。また、この会の開催に当たり、赤坂先生にお骨折りをいただいております。どうもありがとうございます。

本日は「国際英語学科の試み、シナジー効果を求めて」という題のもとに報告をさせていただき、皆さまのご指導をいただきたいと思っております。特に学習支援の立場からどのようなことができるのか、どのようなことをしてきたのか、そしてどのような問題をもっているのか、ということをご報告し、ご指導をいただきたいと思っています。

シナジー効果、あるいは相乗効果というものですが、「1プラス1を2にするのではなく、3にも4にもなるような試み」をどのようにしようとしているのかを中心にご報告させていただきます。

最初に、国際英語学部を開設するまでの経過をご報告させていただきたいと思えます。この学科は1966年に文学部英文学科として発足しました。我々の旧の英文学科ですが、特にイギリス文学、アメリカ文学を中心とした教育研究を基本路線に、36年間やってきました。しかし、時代とともに、年々、社会及び学生のニーズからその基本路線がかけ離れていく事態となりました。

入学生の偏差値もどんどん下がっていきまして、最後には、文学部教授会の中に「英文学科再生委員会」が取りざたされるような事態にまでなってしまいました。これは大変屈辱的なことであり、まさに危機的な状態でした。この事態を何とか打開するため、2000年にその計画案の作成に着手しました。これが国際英語学部の改組への道につながっていったものでございます。この学部には2学科を設置し、ひとつは従来の英文学科を文化の面からとらえる英米文化学科とし、もうひとつは新しく国際英語学科と改組する案でした。

特に、英文学科時代は一体何が悪かったのか？ 何が問題であったのか？ これらについていろいろな反省を含めて調査をしてみました。そこで出てきたのが、学科の教育が学生のニーズ、あるいは社会のニーズから乖離してしまっているということでした。学生のニーズを把握していない。また、教育方針も不徹底であり、指導が一致せず、バラバラな授業展開がなされていました。それに多人数クラスの弊害が追い打ちをかけていました。学生と教員間の乖離があり、教員から学生への一方通行的な授業が多く展開されていたのです。

そこで学生のニーズの調査とその確認をし、それに基づく教育方針の転換を図らなければならぬと考えました。教員中心の教育から学生中心の教育方針の転換、多人数クラスから小人数クラスへの転換、そして学生の教育サービスを確立し、徹底させるということなどを盛り込んだ原案を作成いたしました。それを学部創設の趣意書として文科省へ提出いたしました。それが2000年の春でした。

当初、文科省では、「国際英語」という名称に非常に疑問をもっておりました。この名称に反対する意見も多くあったように聞いております。当時の大学設置委員会の専門委員として、慶應義塾大学塾長の鳥居先生、関西学院大学学長の今田先生、それから東洋大学学長の海老根先生がその任に当たられていました。文科省でヒアリングが開催され、そこで「国際英語」という名称の理由づけや学部の教育基本方針などについて説明いたしました。

質疑応答と長時間のヒアリングが終了したとき、座長であった鳥居先生が次のようなお話をされました。「このような大学設置の審査にこの数年携わってきましたが、本日の中京大学さんのこの新しい国際英語学部の設立案ほど感銘を受けたものはございません。私も勉強させていただきました。」と、数多い文科省の役人の前でおっしゃいました。その言葉に私も深い感銘を受けました。そのような経過を経て、通常は6ヶ月から1年はかかる認可がわずか3ヶ月で下りたのです。これには、専門委員会から文科省への強い要請があったことを後日耳にいたしました。ここに文科省に初

めて「国際英語学部」という名称が登録され、日本で初めて、そして世界でも初めての「国際英語学部」が誕生したのであります。

それでは、このような期待をもって創設されました国際英語学部、特に私が所属しております国際英語学科の基本方針についてご説明したいと思います。この学科は学生を中心に据え、教員は学生の支援者つまりサポーターに徹するという教育理念で始めました。幸いにも、我々専任教員7名という小さな構成人員全員がこの方針でやっていくことを決意しました。問題は、この方針をどのように具体化するかということでした。

多くの学科会議の結果、次のような学習支援策を講じることにいたしました。まず、新しいカリキュラムには、1年次、2年次と、3週間の海外研修を組み込んでおりますが、その引率指導に力を入れようとするものです。教員がこの研修に同行し、24時間、学生のニーズに応えようとするものです。もう一つが、学生と共に活動するピア・サポート・システムです。これは、教育サービス機関に徹するとの考えのもとに、常時、学生たちの抱える問題の把握に努めよう。その問題解決のための工夫を図ろう。問題解決の示唆を与えよう。しかし、問題解決はできる限り学生自身の手で行わせよう。そしてそれらの問題を解決した際の学生の達成感、成就感を積上げさせるようにしよう。そのようなことからこのピア活動が始まったのです。

ピア・グループは16名のグループに2名の教員が担当します。1名は日本人、もう1名は外国人教員が当たります。英語、日本語双方での対応を可能にしております。活動の第一歩は、1週間に一度のピア・ランチなどで始まります。そこに提議されるグループの問題、または個別の問題を教員は聴取し、その相談にのります。1年次、2年次のすべての英語学習クラスはこのピア・グループで構成されます。また、海外研修もこのグループで実施しております。したがって、学生たちの一体感というのでしょうか、絆は非常に強くなります。3年次、4年次はゼミのグループに変わりますが、母体となっているこのピア・グループはそのまま引き継がれていきます。

このピア活動は海外研修の実施などに大きな役割を果たしております。この頃は、協同で活動または団体行動をするのに不向きな学生が多く見受けられますが、この活動は、そういうことを何とか克服する力の一つになっているように思います。このグループ活動力そして団体行動力が、あとで申し述べますが、大学外への「学習発表会」または、企業を招待しての「研究発表会」などを学生たちが企画し、運営するための力となっているようです。

指導方針の転換としましては、従来の受信型学習のように教員から学生に情報を送り込むような一方通行的な学習ではなく、学習者を中心とする発信型学習に転換することを中心とした取り組みをしてまいりました。国際英語の教育理念から、英語の正しさを追求する前に、まず発表できる領域を拡大させようとしております。発話意欲を大事にし、まず発表させよう。そして、その次により適切な英語に変換していこうというものです。学生たちのもつ「正しい英語しか使ってはいけない」という呪縛から解放し、まず自由に英語で発表させ、発表する喜びを知らしめ、その次の段階で、より適切な英語に変えようとするものです。間違いを怖れない。間違いをして学習をする。この方針が英語クラスの中心となっています。これも発信型教育の一端であると思います。また英語クラスの履修生の数を16名に限定し、より密度の高い指導ができるようにしたことも大きな効果をもたらしたものであると思います。

もう一つの学習支援体制としまして、ラーニング・サポート・ウィング (Learning Support Wing)

がありますが、この学習支援センターについてご報告させていただきます。ここには、英語指導を担当する講師が常駐しております。学生たちは質問などをもってこのセンターに集います。このセンターでの使用言語は英語です。日本語を使用せず、より英語を必要とする環境を作っております。教員も、学生も、事務職員も英語で話しております。つたない英語ですが、そこに懸命に学習しようという意欲が見えます。いつ見ても非常に微笑ましいものです。また、このセンターには、コンピューターが設置され、学生たちは課せられた宿題をやっておりますが、これも学習を支援する大きな役割を果たしております。

国際英語学科の新入生は教員から次のような言葉で迎えられます。「今日から、あなた方は私たちの仲間になったのです」「国際英語学科は、あなたたちが作る、あなたたちの学科です」「教員は学習支援者に過ぎません」「みんなで作り上げる授業であり、クラスであり、学科です。何か問題があれば、何でもピアの先生や自分の仲間に相談する姿勢をもちましょう」、このようなことを新入生に言っております。これらの意味するところは、学生は国際英語学科という仲間に入ることです。

1年次の学習の主なものを取ってみますと、新入生ガイダンスとともに全員ヒアリング・テストと英語面接を受け、クラス分け編成を行います。96名ほどの学生を6組に分け、1クラス16名の英語力別のクラスを作ります。毎年、学年末に再びテストを受け、次年度のクラス編成が決定されます。したがって、学生のクラス間の異動も多く見受けられます。2年次以降には、テストの結果に加えて、通常の英語クラスの評価も加味されますので、学生たちはうっかりしていると、下のクラスへ降下することもあり、この時期になりますと、学生たちは戦々恐々としています。

1年次、2年次の秋学期になりますと、学生の手で「学習発表会」が開催されます。これは学生たちの母校の高校生、恩師、そして家族の皆さんを招待して、自分たちの学習の成果をそれぞれピアごとに分かれて発表するものです。毎年、主要テーマとして、例えば貧困、疾病、環境問題などの調査を実施し、パワーポイントなどを用いて英語で発表します。今年も、11月9日（日）に開催いたします。時間がございましたら、是非覗いてやってください。

3年次になりますと、企業を招待しての「研究発表会」を開催します。これもすべて学生の企画、運営によるものです。1月に企業の方々、多い時には30社の方々をお招きしております。事前に3年生全員が研究発表をし、その中から選抜された4グループほどがこの発表会で発表します。会の運営も、またパワーポイントを駆使した発表もすべて英語で、学生を中心とした発信型の教育を展開しています。問題も多々ありますが、これも学習のひとつであるという考えで、より向上させようという工夫を図っております。

3年次からは、就職活動がこれに加わります。2年次の春学期に「キャリア・ディベロップメント」という科目を設置しております。これは、「自分探し」から始め、自分の進路の開拓、あるいは就職に対しての自分自身のアプローチを模索する科目です。また、キャリアセンター、国際センター、そして資格センターの協力のもと、資格の獲得にも力を入れております。TOEICの目標も、企業就職希望者は740点以上、教員就職希望者は900点以上を目指しております。

最後に「インターンシップ」の科目についてご報告させていただきます。この科目は、大学で得た知識を実際に試してみる良い機会であるとの考えのもと、私どもが特に重要視しているものです。学生はこの科目による実体験を通じて、自分の進むべき道を確認しているようです。春・夏両方の

休暇中に1週間、3週間、6週間の間行きます。実施している地域は、国内およびハワイ、ロサンゼルス、イリノイなど多様で、20名から多い時には30名の者が、英語を駆使しての企業体験を行っております。

今まで、申し述べてまいりましたが、学習の相乗効果を促すものとしては、大きく三つに集約されるのではないかと考えます。一つは、学生生活や学業面での問題を持ち寄って相談をし合う「ピア・サポート・システム」です。ここで授業のこと、クラスのことなどの問題が出てきたら、教員はその問題を取り上げて学科会で議題として対応していきます。そうしますと、学生はカリキュラムや科目の新設などに自分たちの意見が反映されるという事実を知ります。これは学生たちの参画も加えた学科作りとなります。自分たちも学科の運営にも携わっているのだということを知ると、自分たちの学科であるという意識も強くなってきます。

このような集団の力を作る基礎となっているのが、1、2年次に行う「海外研修」です。1年次に必須科目としてシンガポールで3週間の研修を行い、2年次にはアメリカ、オーストラリア、イギリスのいずれかでまた3週間の研修を行っておりますが、学生たちは、2名、あるいは3名の同級生たちとの共同生活で他人を思いやる気持ちや、仲間作りのきっかけをつかんでいくものだと思います。それが、国際英語学科の各種の活動の土台となっているように思います。

さらに、もう一つは「研究発表会」です。1年次、2年次の「学習発表会」を経て、3度目の企業に向けての「研究発表会」、これはまさに発信型学習の成果であると私たちは考えています。以上のようなものが、シナジーとしての相乗効果を作り上げて、現在の国際英語学科の学習成果を支えているものだと思います。もし何かご質問などがございましたら、よろしく願いいたします。

【赤坂】 どうもありがとうございました。ご質問もあろうかと思えますけれども、後の討論のところでお願いいたします。

早速コメントを国際教養学部の梅正行先生よりお願いします。よろしくお願いします。

【梅】 国際教養学部で英語を教えています梅と申します。郡先生のもとで学部固有科目運営委員会の委員をしております。今、我々がまさにこれから直面しようとしている苦労を、境先生のところでご議論されたわけですけれども、境先生は、それだけではなくて、我々が存じ上げているのはAVセンターというものがあまして、その時代から何よりもまず学生を大事と考えていろいろな試みをなさってきた。それが2002年の国際英語学部の開設に結実したというように私どもは理解しております。境先生のご発表にコメントを申し上げるなどということは、とても僭越でできないことなのですけれども、役柄上最後に質問という形を取りたいと思いますのでよろしくお願いします。ちなみに国際教養学部が学部になったことで何が変わったかということの日頃、半年間考えておりますと、やはり教員のやる気が随分増したのではないかと私は考えております。

そしてもう一つ、今は1年の英語を担当しておりますけれども学生の要求が非常に高い、様々なクレームがくる。それから前の授業で言ったことに対して次は「あーしてくれ、こうしてくれ」と、これは全学共通科目の「英語」ではあまりないことです。ということで、教員の意識が変わった。変わらざるをえないということで、やりがいとともに責任をひしひしと感ずるようになりました。

すでに私が予め用意しておいた質問に対しては先生の話の中にヒントがたくさんありましたので、復習という形になりますが、二つばかり質問をさせていただきたいと思います。第一番目。国際英語学部で4年のゼミを担当しておりますと、1年の基礎ゼミあたりに入ってきた学生が「先生、英

語でコミュニケーションをできるようにになりたい」「英語を使えるようにになりたい」といって入ってくるわけです。それは先生方の教育のご方針ですから、そうやって受験生がいつくる。ところがです、その中でも1年、2年、3年と経るうちに、そう言うことはあまり言わなくなって何か別のものを見つける学生が出てくる。そうするとそういう学生は就職が早く決まっている現状がわかるようです。英語プラス何かをつかんでいくことが大事である。その何かに対して、先生方はそこで、どういう指導をされているのか？ ということの一つ質問として考えていました。

もう一点は、先生方のご活動を見ますと非常に教員の時間を取られる。当然だと思いますけれど、イベントをいくつも打ち出していくと企画と中堅、若手教員の研究時間の確保ということのバランスをどう取っていくのか？ つまりイベントで学生に全部時間をささげてしまうと、今度は研究が枯渇しますので枯渇した分、学生は教員についてこないようなことになりますから、どうやってインプットとアウトプットのバランスを取るのかということを考えました。

【赤坂】 どうも、ありがとうございました。では簡単をお願いします。

【境】 まず最初の質問ですけれども、それはまさに我々の国際英語学科が抱えている問題です。英語ができて当たり前、しかし、その英語で一体何をするのが一番のポイントなのです。2年次に「キャリア・ディベロップメント」という科目を新設したのも、その理由の一つです。また「インターンシップ」科目も同じです。

それぞれの英語力を駆使して、いろいろ自分たち独自で見つけてきたもので何かを始めているのが現状のようです。例えば、インドに興味のある、ある学生はマザー・テレサの「死にゆく人の家」というホスピス施設へ行き、ひと夏を患者の寝食の手助けをし、またあるグループは、フィリピンの貧しい農村地区へ出かけ、井戸掘りや、児童教育の手伝いをしています。このように、いろいろなことをやっているわけですが、一つにはこれを自分たちで探し出してやっていること、またそれをやるだけの英語力が備わっていないとできないことも事実だと思うのです。幸いにもこれらの学生たちは、良い就職をし、現在、それらの体験を生かして、企業で、あるいは教員として働いています。このように、自分から探して英語力を駆使してやっていく学生は良いのですが、なかなか全員がそのようにはいかない。それも現実です。ありとあらゆる機会を作って、学生たちにその答えを自分から探せるような場面を作っていきたいと思います。

もう一つの教員が多忙すぎるのではないかというご質問ですが、まさにその通りです。若手教員の研究時間がないのではないかというお話ですが、これに対しては、今まで3週間の海外研修の引率を一人で担当してきましたが、昨年来より、二人で担当し、途中で交代をすることによってその分を緩和するようしております。また、その他にも、いろんな便宜を図って決して研究時間を阻害することはないように取り計らっております。しかし、梅先生がおっしゃるように、これだけの多くのイベントを抱えているものですから、それをやっていくのは大変です。しかし、お陰さまで、学生たちが主体的に動くという国際英語学科の伝統があり、我々も随分それに救われております。実は、「研究発表会」も最初のスタートは我々教員が考えたことではないのです。国際英語学科という名称になって初めて卒業する一期生が自分たちのことを世界に知ってもらいたい、どうしたら皆さんに知ってもらえるだろうか。学生たちがみんな考えてまして、この「研究発表会」にたどりついたのです。しかも、これから社会に出て行くわけですから、特にお世話になるであろう企業の方々をお呼びしようと思ったのです。これが最初でした。学生自らがそのようなことを発案して始めた

のが最初のスタートなのです。我々教員はそれを一生懸命にサポートしていく。そのような学生と教員との関係で今までやってきました。だから、私は学生たちの力はすごいものがあるなあと思っています。本当に驚かされることもたくさんあります。しかし、これは皆さんも共鳴されることだと思いますが、教員冥利に尽きるものがあると思います。学生と教員が一体となって物事は作られているのであることを痛切に感じます。このように、我々教員は学生のサポートに徹するという姿勢を持ち続けたいと肝に銘じております。これでよろしいでしょうか。

【赤坂】 どうもありがとうございます。それでは残り時間は少ないですが、討論に移らせていただきます。報告者の先生方、恐れ入ります。前のテーブルのところにおこしいただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

それでは、議論の柱を建ててということではなくて、フロアの方から報告者の先生方にご質問、ご意見がいろいろとおありだろうと思いますので、忌憚のないご発言をお願いしたいと思います。どなたからでも結構ですのでよろしくお願いいたします。

国際教養学部は、学生を中心に据えつつ、「自律的な学修者をどう育てるのか？」ということから、この会を設けました。お三方から非常に良いご報告をいただきました。

羅先生からは、負担の問題と TA 活用の可能性へのお話がありました。また、最後の境先生からは、いろいろなことがあっても、我々はサポーターに徹するという力強いご意見もありました。それぞれ共通する点が多かったかと思います。ここには、国際教養学部、国際英語学部、総合政策学部以外に、豊田学舎や学外からも参加されておられます。

どうぞ時間があまりありませんので、積極的にご発言をお願いします。

*

【羅】 ご質問ありがとうございます。

まず 275 人という授業の人数において、グループ内で自律的学修を促すような授業をやっていくには、TA（ティ칭ング・アシスタント）が 5 人程度いないとおそらく不可能だと思っています。したがって、芝居に総合政策学部の先生が登場する際には、その先生のゼミの学生たちをお願いします。すると学生たちが自分の先生の真似をすとかですね、それで笑いをとって授業が面白くなっていくようなことはあります、グループ内の相乗作用を促すような形の自律的学修をやっていくのは、今の段階ではまだ無理かなという感じています。

私に可能なことは、小レポートを初めて書いてもらってそれをみていくうちに、この学生は文章能力があるとか、この学生は授業中の私の質問に回答してくれそうな学生だとか、先にチェックしていくのですね。そういう学生たち交互に質問を投げかけることによって、ふだんなかなか回答していない学生たちがちょっとびっくりするような、「こんなに総合政策学部はレベル高いの？」と感じさせるような意見を出してくれます。こういうふうには、授業の中の緊張感や自分たちに対する再評価を促すようなことはやろうとしています。

誤解を招いてはいけませんので念のため申し上げますが、芝居はしょっちゅうやっているわけはありません。この内容は芝居にするといいかなあと判断しておこなっています。また、1 時限目の多人数の授業ですので、授業の流れや集中力を高めるために、2～3 回ぐらいはやっているということです。

【赤坂】 どうもありがとうございました。それでは境先生お願いいたします。

【境】 ご質問のピア・グループといいますと、教員 2 名と 1 年生の学生 16 名ですけれども、これは横のつながりとしての同級生ですが、その上に 2 年生、3 年生、そしてさらに 4 年生と総勢 64 名の大きな集団となります。この縦のつながりもまた非常に重要です。新しく 1 年生が入ってきますと、歓迎会もやりますし、また 4 年生が卒業する時には「追い出し会」もします。一緒に旅に出たり、食事をしたり、結構交流は盛んです。そして、これらの交流の中で、先輩は後輩に助言をしたり、いろいろな問題に対応しているようです。この縦のつながりにより、後輩たちも気軽に先輩に相談できるようです。このように、我々教員が言うよりも、学生たちが対応した方が余程いいようです。このような縦のつながりも大変大事にしております。

そのような話し合いの中で、学生たちの主体性をどのように引き出していくのか。それについては、「君たちはこれに対してどうするのか」というような問いかけをします。ピアの話し合いの中では、あらゆる問題が出てきます。例えば、授業の問題とか、先生の指導の仕方の問題だとか、それらについては、我々教員が対応します。その問題に関する調査を実施して、その対応を学科会議で討議していきます。それによって具体的な対応が決定し、それが実行されると、その問題を提議した学生たちは、自分たちの言ったことが処理されていることを実感します。

それから国際学科は外国人の教員がたくさんいるものですから、その指導方法も日本人と少し変わっています。何か質問がある時はどのような時でもすぐに挙手をして質問をするように 1 年次から指導されています。日本人の場合は授業が終わってから尋ねに行くというところでしょうか。ですから、授業を見ていると、しょっちゅう質問が出ています。先生はその度に話を折られますが、それが良いのだと、質問がないのは駄目なんだというような態勢でやっております。それが我々日本人に対しても同じようにいつでも手を挙げて質問してくるものですから、最初は戸惑いますが、これも国際英語のやり方なのだ、

今では質問がないとどうしたのかなあと心配さえます。

*

【境】 予算は今のところはありません。

ただし、具体的には、例えばこういう科目を作ってほしいという要望があつて、それに応えて開設した科目も確かにあります。

【赤坂】 どうもありがとうございました。

*

【赤坂】 どうもありがとうございました。郡先生お願いいたします。

【郡】 ゼミは今募集しているところなのですが、ご指摘の点は「悩みの種」といいますか、むずかしい問題ですね。ゼミは1学年9クラスです。「言語文化系」の5つの言語と「英語」の6分野からなる「言語文化系」、それに「思想文化系」、「歴史文化系」、「国際社会系」を合わせて9分野なのです。

例えば、フランス語を選択した学生がドイツ語や中国語のゼミに行くことは、おっしゃる通り、できません。5つの言語に関連するゼミの中では、1年次で選択した言語のところにしかいけない。しかし、それ以外の「英語」、「思想」、「歴史」、「国際社会」関連のゼミの場合には、これらの中から選ぶことができる仕組みにしています。

それでも、やはり定員を設けていますので、第1から第2、第3までの希望と志望の動機を書かせた上で、語学の成績なども考慮して調整していこうかと考えています。これでうまくいってくれば良いのですが、今はどういうふうになるのか判断できない現状にいます。

【赤坂】 どうもありがとうございました。

予定の時間が来てしまいました。まだご質問、ご意見もあろうかと思しますので、これで「お仕舞い」ということではなく、各先生方に機会をお作りいただいて、個々に伺っていただければ幸いです。中京大学の各学部学科がより良く発展していけるようお互いに努力をしまいたいと思います。

本日はお忙しいところをご参集いただきまして誠にありがとうございました。

最後に、本来は国際教養学部長の伊藤進先生が閉会のご挨拶をされる予定でしたが、急な所要ができましたので、部長代理の山本茂義先生からご挨拶をいただきたいと思います。

【山本】 どうもありがとうございました。

本来ならば伊藤学部長の方から挨拶をしないといけないのですが、私が代理をさせていただきます。今回からは今までやっておりまして、経験交流会がFD・SDコンソーシアム名古屋の一環ということに位置づけられまして重要度が増しておりますので、粗相のないようにあらかじめ伊藤学部長からいただいております挨拶文を代読させていただきます。

本日はご発表下さいました、三名の先生方ならびにコメンテーターを担当して下さった先生方、誠にありがとうございました。

私たちの経験交流会も回を重ねてまいりまして、はや今回で9回目となりました。その都度貴重な体験と提言を披露してくださって、私たちも多くを学び参考にさせていただいてきましたが、今回は今までの教養部が改組されて国際教養学部として、新しいスタートを切ってから最初の、そういう意味では記念すべき経験交流会になったと思います。

国際教養学部の教育のあり方を他学部の皆さんにもご紹介するだけでなく、後発の学部として、積極的に教育改革に取り組んでいらっしゃる総合政策学部と国際英語学部の教育の試みに学ぶことは大いに有益であったと思っています。

大学の教育水準を引き上げるためにも、学内で学部の壁を取り払ってFDについて真剣に研究しなければならない時期にきていると認識しています。実際、学内では学長が主催するFD小委員会が準備されつつありますし、学外的には今回の交流会はFD・SDコンソーシアム名古屋の後援の形を取っています。私たちの経験交流会が学内においてFD問題を積極的に考えていく契機となりその一助となれば本学も幸せです。

本日は学長はじめご出席くださった皆さんに改めてお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。以上でございます。

【赤坂】 どうもありがとうございました。これで「お開き」とさせていただきます。先生方、お忙しいところご協力をどうもありがとうございました。

(反訳終了)